研究ノート

ボランティア文化研究の挑戦
―日・韓・加３カ国ボランティア意識調査を振り返って―

小澤　亘[i]

筆者が1996年から取り組んできたボランティア意識調査を振り返り，市民教育の視点から，ボランティア文化に関する国際比較研究の意義について考察する。日本・韓国・カナダ３カ国の高校・大学をフィールドとして実施した経年調査データを紹介しながら，ボランティア活動に関する２つのイメージ構造の把握というアイディアに依拠した，ボランティア文化可視化・数値化の試みについて，その有効性を確認したうえで，高校・大学生と高校教員の３カ国の都市別データ，そして，京都と東京のデータを比較することによって，ボランティア文化の国際比較分析を行う。ボランティア文化を支える文化装置として，学校教育に注目し，各国ボランティア文化の相違の理解に努めるとともに，今後の研究課題を整理する。

キーワード：ボランティア文化，国際比較，イメージ構造，文化装置，市民教育

はじめに：ボランティア文化研究の経過と問題設定

筆者は，これまで日本・韓国・カナダにおいて，高校と大学をフィールドとして，ボランティア意識調査を経年的に実施してきた。実施してきた調査は，以下のようなものである[1)]。

①1996年の立命館大学教育科学研究所プロジェクトによる立命館大学生に対する「学びの意識調査」。

②2000年・2001年の大学生を対象とする日本（京都・東京），韓国（ソウル），カナダ（トロント）における「ボランティア意識調査」。

③2001年・2002年，2004年，2007年の高校生を対象とする日本（京都），韓国（ソウル），カナダ（トロント）における「ボランティア意識調査」の継続実施。2004年調査では，高校教員も調査対象とした。

④2007年，2008年の都立高校での高校生を対象とする２回にわたる「ボランティア意識調査」。

⑤2010年・2011年の大学生を対象とする日本（京都・東京），韓国（ソウル），カナダ（トロント）における「ボランティア意識調査」。

また，こうした青年層に対するボランティア意識調査と並んで，2012年には加藤博史氏（龍谷大学）を中心する文部科学省科学研究費助成プロジェクトに参加し，「京都市・宇治市・八幡市における民生委員悉皆調査」を実施した。そして2015年には，産業社会学部社会調査士プログラムの調査実習の一環として，「京都市老人福祉員に対する調査」を実施してきた。

こうした一連のボランティア意識調査のきっかけとなったのは，1995年阪神淡路大震災の後に生じた「ボランティアブーム」であった。立命館大学においても，震災ボランティア情報センターが学生たちのイニシアティブによって立ち上げられ，関西地域

i　立命館大学産業社会学部教授

の多くの若者たちが被災地にボランティアとして入り活動した。社会に対して無関心であると批判されてきた従来型若者像を一変させる「活動する若者たち」の登場であった。

1995年のボランティアブームを契機として，日本では新たな市民社会の可能性が論じられ始められた。赤井正二氏（立命館大学）は，1985年以来の新聞データベースを利用して記事分析を試み，阪神淡路大震災を契機として，確かに，「市民社会」という言葉の使用頻度が急上昇したこと，そして記事内容分析から，この時から「ボランティア」「NPO」という言葉と組み合わせて「市民社会」が語られるようになったことを実証的に明らかにしている。社会変動は，言葉の使われ方の変化を必ず伴うが，こうした社会変動の軌跡を新聞記事分析から把握した重要な発見だった（赤井 1998）。

筆者は，1996年の立命館大学生に対する学びの意識調査プロジェクトの一環として，ボランティア活動が大学生の「学び」に対して与える影響に注目して調査を実施した。この調査データからは，阪神淡路大震災に際して調査対象学生の５％程度の学生が震災ボランティア活動を体験したこと，そしてじつは，その半数が１回限りの一過性ボランティアに終わっていること（10回以上体験者は，被災者支援ボランティアの７％程度），しかしながらボランティア活動を行っている学生は，学生生活全般にわたって積極的な学生が多く，ボランティア活動が10回を越えると問題発見的な学びが深まることを確認することができた（小澤 1996）。その後，この調査を通じて巡り合った８名の学生を３年間にわたり追跡した継続的インタビュー調査を実施した。その成果は，筆者の編著作『ボランティアの文化社会学』（世界思想社，2001年）にまとめられている。若者たちそれぞれの人生の文脈で，「ボランティア活動」がその生き方に重要な影響をもたらしたことを跡付けることができた。こうしたパネル調査によって得られた知見を基盤として，日本・韓国・カナダの大学生・高校生を対象とした国際調査を2000年から2011年に至るまで継続的に実施してきた。

こうした一連のボランティア意識調査を実施した期間は，まさに各国の中等教育課程で，義務的なボランティア教育プログラムが導入された時機に重なっていた。1999年には，カナダ・オンタリオ州で40時間のボランティア活動（community involvement activities）が高校卒業要件とされ，また韓国では，1995年にソウル市教育委員会によって，初めて，中学校教育課程に義務的なボランティア教育プログラムが導入され，その後，第７次教育課程改革の実施に伴い，中学・高等学校の卒業要件として一定時間のボランティア活動が全国で義務づけられるようになった。こうした動きを受けて，日本でもボランティア教育義務化が盛んに議論されるようになり，2007年から東京都の公立高校において，「奉仕」という科目（ただし，科目名称は各高校によって変更可）として，ボランティア活動が必履修化された（ただし，単位取得が義務付けられた必修化ではない）。こうした教育制度の転換期を受けて，一連のボランティア意識調査では，義務的なボランティア教育制度に関する設問も工夫している。こうした教育制度導入に焦点を当てた研究成果は，拙稿「青年ボランティア文化の日・韓・加３カ国比較研究：市民社会とボランティア問題」（立命館大学人文科学研究，2013年３月）で報告している。

拙論の要点を簡単にまとめておくと，日本の青年層は，有償ボランティア制度（ボランティア活動に一定の対価を与えること）には肯定的であるものの，義務的なボランティア教育プログラムには否定的であり，こうした教育プログラムから得られるキャリア形成や人脈形成などの実利について肯定的に評価できないという，カナダや韓国では見られない「ねじれた」認知フレームを持っていることを明らかにしている。また，オンタリオ州や韓国で導入された制度は，事前事後の教育プログラムが欠如した，いわば「（生徒のボランティア時間を計測・管理するだけの）スタンプ制度」に過ぎないと揶揄されるように不十分な制度にすぎないが，調査データから，

高校での義務的ボランティア体験時間と大学時代のボランティア活動時間の相関性を分析すると，有意水準１％（両側）で正の相関関係があることが明らかになった。つまり，たとえ，制度としては不十分であっても，カナダ・韓国において，中等教育課程の義務的なボランティアプログラムに熱心に取り組んだ学生は，大学生になっても継続的にボランティア活動に取り組む傾向が高く，高校時代のボランティア体験が一過性のものではなく，それ以降の青年の対社会活動を規定していることを明らかにすることができた。

ところで，「ボランティア文化」を把握しようとする際，なんらか比較文化の手法を工夫する必要がある。筆者が試みたボランティア意識調査では，ボランティア活動に対して抱く「イメージ」の調査を調査票項目の中核に据えている。こうしたアイディアは，総務庁青少年対策本部編『青少年とボランティア活動―「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書』（大蔵省印刷局，1994年）から着想を得たものである。この調査で，千石保，興梠寛，木全力夫ら各氏は，「時間に余裕のある人がやる」「思いやりのある」「魅力的な」など24項目のボランティアイメージについて，４段階スケールでその肯定・否定度を聞いている[2)]。

筆者は，先に述べた大学生に対する経年的なパネル調査を通じて，これらのイメージの中から，「時間に余裕がある人がする」「困った人を助ける」など重要と思われる10個のイメージを選別したうえで，さらに，「自己犠牲」「偽善的な」「楽しい」「自分が成長する」「遊び感覚」という５つのイメージを加えて，表１，２，３で示した15個のボランティアイメージに関する質問を調査票の冒頭に置いている。

加えて一連の調査では，ボランティア活動を体験することによって，いかなる「学びの力（能力）」が身に付いたかという認識に関しても，調査の中核的な質問として置いている。「学びの力（能力）」の類型概念は，1996年の立命館大学教育科学研究所プロジェクトにおける立命館大学生に対する「学びの意識調査」で工夫されたもので，具体的には，以下の11類型である（一部，筆者が命名を変更している）。

独習能力　：ひとりで学習する力
集団学習力：みんなと一緒に学習する力
発見学習力：自分で問題を発見する力
自己表現力：意見をまとめて話したり書いたりする力
集団展開力：グループの意見を調整，方向づけたりする力
他者理解力：相手の意見や相手の立場を理解する力
自己修正力：自分の意見を修正し，グループに協調する力
文脈把握力：新聞や本を読んで，論点や文脈を把握する力
社会的教養：社会を政治・経済・文化など広い視点から見る力
企画提案力：新たな企画を提案する力
社会連携力：さまざまな人たちと『つながり』を作っていく力

筆者は，こうした２つの調査データにボランティア関心度のデータを加えることによって，以下の「イメージ構造」の概念を工夫した。

イメージ構造Ａ：各ボランティアイメージとボランティア関心度との相関係数のリスト
イメージ構造Ｂ：ボランティア活動を通じて，獲得されたと認識・自覚されている能力の肯定者比率のリスト（対ボランティア体験者合計）

ボランティアイメージの質問に対して，回答者は，いかなる回答を期待されるかという社会的期待に惑わされることは少なく，建前による偏向を可能なかぎり排除することが可能となる。こうしたイメージの質問とは，離れた別段の質問の流れで聞かれるボランティア関心度との間で相関係数を指標化したイ

メージ構造Ａの数値によって，回答者も自覚することもなく，心の底で抱く「ボランティア観」を可視化できると考えたからである。

他方，実際のボランティア活動を通じて，身に付いたと認識される「学びの力（能力）」を11類型化したうえで，それぞれの能力について肯定比率を，ボランティア活動による「学びのスペクトル」＝イメージ構造Ｂとして把握することにより，ボランティア活動体験の有意義性を数値化することが可能となる。

本稿では，これら２つのイメージ構造について，高校・大学生と高校教員の３カ国の都市別データ，そして引き続き，京都と東京のデータを解析し，ボランティア文化を数値化・可視化する。さらに，ボランティア文化の背景となっている「文化装置」として，学校現場におけるボランティア教育に関連する教科書・教材に注目し，その試行的な分析を試みる。

１．３カ国調査データに基づくボランティア文化の視覚化

一連のボランティア意識調査は，３カ国の４つの都市，すなわち，京都・東京・ソウル・トロントで実施された。ただし，東京で実施したのは，2000年・2001年および2010年・2011年の大学生調査，および2007年，2008年の高校生調査の計４回である。１－１節では，都市データがそれぞれの国を代表するものと仮定して，日本（京都），韓国（ソウル），カナダ（オンタリオ州トロント）の経年データから，イメージ構造Ａに注目して，各国のボランティア文化の可視化を試みる。そして，引き続き，2004年と2007年のデータに依拠して，各国ごとに生徒と先生のイメージ構造Ｂを分析する。１－２節では，京都データと東京データのイメージ構造ＡおよびＢに注目することによって，日本のケースにおける義務的ボランティアプログラム導入の影響を解析する。これらの分析を通じて，２つのイメージ構造概念に基づくボランティア文化把握の有効性について検証していく。

１－１　３カ国の経年調査データと生徒・教員データ比較

表１は，2000年・2001年調査から2010年・2011年調査に至る各国それぞれ６つのデータセットから大学生・高校生・高校教員のボランティアイメージについて，各国の肯定比率（４段階スケールで，「とてもそう思う」「そう思う」の回答者合計比率）の経年変化をまとめたものである。また，表２は，それぞれのボランティアイメージとボランティア関心度の相関係数（Pearson’s r）の経年変化をまとめたものである。

データを見ていくうえで，注意すべきは，2000年・2001年大学生調査におけるボランティア関心度は，４段階スケールでの把握だったが，その後，2001年・2002年高校調査以降では，７段階スケールでボランティア関心度を把握している点である。表２の2000年・2001年調査データのイメージ構造Ａにおいて有効数値が少なかったり，他の年度に比べて低い数値が並んでいるのは，ボランティア関心度のスケールに主たる原因があると思われる。また，表２の2004年カナダ（オンタリオ州トロント）教員データのイメージ構造Ａで有効数値が少ないのは，データ件数の少なさが影響していると思われる。では，さっそく，表１から理解できることをまとめておこう。

（１）「イメージはそもそも主観的なものであり，データとしては不安定で一貫性を欠くものである」と思われがちであるが，経年的な調査結果から明らかなように，国別（都市別）・世代別に確かな傾向性と一定の構造があることは明らかである。たとえば，「偽善的な」というボランティアイメージは，日本の青年層では，一貫して３割程度が保持していることが分かる。2010年・2011年大学生データでは，その比率は，じつに４割を超えるまでに至っている。2004年教員データから，大人世代ではその比率が１

割程度であることから，日本においては，とりわけ若年層において「ボランティア活動＝偽善的」という認識フレームを持つ比率が高くなっていることが明らかとなる。こうした背景には，何らか日本特有の社会構造が伏在していることが推察される。

（2）2000年・2001年の韓国（ソウル）とカナダ（オンタリオ州トロント）の大学生データでは，「偽善的な」というイメージは，いずれも，10％程度以下であったが，ボランティア活動が義務化されると2001年・2002年高校データから，その比率は上昇し始め，高校生データでは以前の3倍のレベルまでに達している。当初，これら2国の学校関係者や研究者からは，ボランティア調査で，なぜ「偽善的」というイメージを調査するのかと非難されたものであるが，制度変更とともに，確かに青年層の意識は変化していったのである。こうした傾向は，「強制的」というイメージでも同様に読みとれる。この他にも，長期的に増減しているボランティアイメージが見受けられる。例えば，「時間に余裕のある人がする」は3カ国とも，「自己犠牲」「冒険的な」は日本・カナダで，「人気がある」「おせっかいな」はカナダで，「まじめな」は日本で，それぞれ長期的に上昇している。これに対して，「遊び感覚」「冒険的な」は韓国で，「恥ずかしい」は日本で長期的に減少傾向にあることも明らかとなる。

（3）大学生と高校生のデータを比較すると，「冒険的な」「楽しい」「自分が成長する」といったボランティアイメージでは，各国とも，高校生データが大学生を下回っている。また，「恥ずかしい」といったボランティアイメージでは，高校生データが上回っている。つまり，ポジティブなボランティアイメージ（正確な定義は，この後，説明）を構成する主要なイメージにおいて，大学生データが高校生データを質的に凌駕していることが明らかとなる。これはボランティア意識の成長の過程として捉えることができるだろう。

（4）表1で教員データを学生データと比較すると，「偽善的な」「強制的な」というイメージで，学生データよりかなり低い数値となっていることが分かる。韓国・カナダ（オンタリオ州）の教育改革後における両者の認識のギャップは大きい。また，仔細に見ていくと，「冒険的な」というイメージで，カナダの教員は学生データより高い数値が出ているが，日韓では低い数値に留まっている。この現象は，「楽しい」というイメージでも同様である。日韓の教員は，カナダに比べて，ボランティア活動に対する魅力を十分に感じられていないのである。

引き続き，表2から理解できることをまとめていこう。ここで，ボランティア関心度との間で，正の相関関係を持つイメージをポジティブイメージ，負の相関関係を持つものをネガティブイメージと呼ぶことにしよう。

（1）イメージ構造Aの全体を見ていくと，「楽しい」「自分が成長する」「知識や経験が社会に生きる」「お金では得られない」などはポジティブイメージであり，「偽善的な」「おせっかいな」「恥ずかしい」「時間に余裕にある人がする」はネガティブイメージであることが分かる。こうした構造は，ボランティアに対する基本イメージとして，各国に共通するものであることが明らかである。

（2）しかしながら，いくつかのボランティアイメージで，国（都市）あるいは調査年によって，他とは著しい違いを見せるイメージもある。たとえば「自己犠牲」は，日本・カナダ（オンタリオ州）では，ネガティブイメージであるのに対して，韓国の2004年・2007年高校生データでは，ポジティブイメージとなっている。つまり，韓国の高校生では，「自己犠牲」というイメージを持つ生徒ほど，ボランティア関心度が高まる傾向があるわけである。これに対して，「まじめな」は，韓国・カナダではポジティブイメージであるのに対して，日本ではネガティブイメージとなっている。こうした傾向は「遊び感覚」でも見てとれる。また，日韓では，「強制的な」はネガティブイメージ，「困った人を助ける」はポジティブイメージであるが，カナダでは無相関である。

（3）教員データでは，「人気のある」は3カ国と

表１　ボランティアイメージ（2000年～2011年の経年変化　%）

ボランティアイメージ	国（都市）別	2000・2001 大学学生	2001・2002 高校生徒	2004・2005 高校生徒	2004 高校教員	2007 高校生徒	2010・2011 大学学生
自己犠牲	日本（京都）	33.0	33.3	34.2	26.2	32.7	45.2
	韓国（ソウル）	80.1	74.1	76.9	75.2	73.6	80.6
	カナダ（トロント）	52.5	50.9	53.2	69.5	53.7	66.8
偽善的な	日本（京都）	37.4	31.0	29.1	9.7	32.8	41.6
	韓国（ソウル）	10.4	17.1	26.4	6.9	32.6	16.8
	カナダ（トロント）	5.1	15.3	18.6	3.4	17.0	10.8
困った人を助ける	日本（京都）	88.9	89.3	91.4	88.9	92.5	91.3
	韓国（ソウル）	91.4	89.7	91.1	94.0	87.9	93.2
	カナダ（トロント）	62.9	61.9	64.4	53.3	58.4	56.6
人気のある	日本（京都）	30.1	14.8	13.8	18.5	12.7	32.2
	韓国（ソウル）	18.6	23.3	24.2	17.3	32.9	35.9
	カナダ（トロント）	37.9	40.6	45.9	55.0	45.4	52.3
強制的な	日本（京都）	7.9	11.9	10.2	6.1	14.2	10.3
	韓国（ソウル）	10.4	22.7	28.0	13.4	30.0	15.7
	カナダ（トロント）	12.5	49.5	63.3	33.3	67.5	29.7
お金では得られない	日本（京都）	82.5	77.1	81.2	88.9	79.5	82.2
	韓国（ソウル）	78.4	83.1	77.6	85.9	78.3	75.4
	カナダ（トロント）	82.6	80.7	75.1	81.4	76.4	76.1
冒険的な	日本（京都）	44.3	37.7	41.8	29.1	42.9	59.5
	韓国（ソウル）	68.2	56.4	51.0	41.1	54.4	52.6
	カナダ（トロント）	68.5	61.7	64.7	74.1	68.7	80.3
知識や経験が社会に生きる	日本（京都）	88.7	80.1	82.0	87.3	79.7	86.6
	韓国（ソウル）	90.4	82.7	85.0	93.8	78.4	91.6
	カナダ（トロント）	96.3	92.8	95.2	96.7	92.5	97.0
楽しい	日本（京都）	56.8	44.8	46.6	50.1	46.5	63.4
	韓国（ソウル）	67.4	64.8	61.3	73.7	59.6	73.6
	カナダ（トロント）	89.2	78.7	81.7	96.7	79.9	89.1
おせっかいな	日本（京都）	26.2	21.2	18.4	7.0	19.5	27.7
	韓国（ソウル）	8.8	14.4	46.7	25.8	49.1	8.6
	カナダ（トロント）	12.2	21.1	24.4	11.9	33.6	21.8
自分が成長する	日本（京都）	92.5	83.7	83.2	93.5	81.7	90.0
	韓国（ソウル）	92.8	87.0	85.8	93.5	81.3	92.9
	カナダ（トロント）	97.9	87.0	92.9	96.7	89.2	97.4
まじめな	日本（京都）	70.1	72.2	68.2	79.2	79.3	82.2
	韓国（ソウル）	91.8	89.7	89.4	94.4	81.4	91.1
	カナダ（トロント）	84.2	82.7	86.3	94.7	81.8	83.3
恥ずかしい	日本（京都）	17.7	21.2	16.5	6.5	17.7	10.6
	韓国（ソウル）	7.6	9.5	12.5	2.9	13.3	4.7
	カナダ（トロント）	5.4	8.9	9.9	6.9	14.4	7.6
遊び感覚	日本（京都）	10.3	13.1	10.3	5.1	11.5	13.1
	韓国（ソウル）	29.2	34.4	17.8	6.0	15.9	14.9
	カナダ（トロント）	27.3	29.2	37.3	27.6	32.2	32.8
時間に余裕のある人がする	日本（京都）	53.4	50.3	53.3	53.8	61.4	62.9
	韓国（ソウル）	47.1	46.6	44.0	25.3	46.1	52.0
	カナダ（トロント）	26.6	42.6	42.2	28.3	42.4	44.5
データ件数	日本（京都）	1191	752	744	416	875	321
	韓国（ソウル）	500	770	914	665	760	382
	カナダ（トロント）	243	645	478	60	538	265

備考：Pearson's r　有意水準　＊＊は１%以下，＊は５%以下

表２　ボランティアイメージと関心の相関係数（2000年～2011年の経年変化　Pearson's r）

ボランティアイメージ	国（都市）別	2000・2001 大学学生		2001・2002 高校生徒		2004 高校生徒		2004 高校教員		2007 高校生徒		2010・2011 大学学生	
自己犠牲	日本（京都）	−0.226	**	−0.316	**	−0.269	**	−0.162	**	−0.250	**	−0.345	**
	韓国（ソウル）	0.062		0.032		0.139	**	0.022		0.123	**	0.060	
	カナダ（トロント）	−0.111		0.067		−0.123	*	−0.112		−0.116	**	−0.130	*
偽善的な	日本（京都）	−0.077	**	−0.300	**	−0.317	**	−0.268	**	−0.333	**	−0.172	**
	韓国（ソウル）	−0.117	**	−0.283	**	−0.167	**	−0.143	**	−0.232	**	−0.212	**
	カナダ（トロント）	0.035		−0.156	**	−0.260	**	−0.254		−0.185	**	−0.186	**
困った人を助ける	日本（京都）	−0.017		0.062		0.102	**	0.005		0.062		0.019	
	韓国（ソウル）	0.145	**	0.168	**	0.180	**	0.113	**	0.246	**	0.140	**
	カナダ（トロント）	−0.078		0.006		0.013		0.023		0.064		−0.150	*
人気のある	日本（京都）	0.071	*	0.248	**	0.245	**	0.035		0.251	**	0.142	*
	韓国（ソウル）	0.171	**	0.208	**	0.137	**	0.030		0.234	**	0.216	**
	カナダ（トロント）	0.117		0.141	**	0.151	**	0.024		0.159	**	0.156	*
強制的な	日本（京都）	−0.143	**	−0.207	**	−0.215	**	−0.230	**	−0.235	**	−0.142	*
	韓国（ソウル）	−0.089		−0.269	**	−0.161	**	−0.122	**	−0.294	**	−0.106	*
	カナダ（トロント）	0.022		0.002		0.054		−0.011		0.084		0.043	
お金では得られない	日本（京都）	0.102	**	0.277	**	0.318	**	0.173	**	0.238	**	0.275	**
	韓国（ソウル）	0.184	**	0.206	**	0.161	**	0.146	**	0.242	**	0.199	**
	カナダ（トロント）	−0.011		0.204	**	0.174	**	0.291	*	0.196	**	0.024	
冒険的な	日本（京都）	0.049		0.187	**	0.101	**	0.015		0.198	**	0.195	**
	韓国（ソウル）	0.182	**	0.151	**	0.105	**	0.025		0.232	**	0.112	*
	カナダ（トロント）	0.039		0.269	**	0.245	**	0.317	*	0.334	**	0.240	**
知識や経験が社会に生きる	日本（京都）	0.304	**	0.343	**	0.341	**	0.277	**	0.379	**	0.288	**
	韓国（ソウル）	0.245	**	0.312	**	0.274	**	0.243	**	0.358	**	0.308	**
	カナダ（トロント）	0.052		0.247	**	0.307	**	0.106		0.240	**	0.214	**
楽しい	日本（京都）	0.451	**	0.507	**	0.483	**	0.360	**	0.486	**	0.454	**
	韓国（ソウル）	0.320	**	0.436	**	0.417	**	0.294	**	0.494	**	0.405	**
	カナダ（トロント）	0.089		0.460	**	0.429	**	0.286	*	0.460	**	0.352	**
おせっかいな	日本（京都）	−0.128	**	−0.244	**	−0.245	**	−0.212	**	−0.249	**	−0.135	*
	韓国（ソウル）	−0.237	**	−0.307	**	−0.400	**	−0.326	**	−0.404	**	−0.280	**
	カナダ（トロント）	−0.029		−0.320	**	−0.283	**	−0.212		−0.328	**	−0.162	**
自分が成長する	日本（京都）	0.363	**	0.355	**	0.405	**	0.303	**	0.376	**	0.347	**
	韓国（ソウル）	0.210	**	0.324	**	0.336	**	0.235	**	0.364	**	0.280	**
	カナダ（トロント）	0.018		0.300	**	0.301	**	0.246		0.271	**	0.112	
まじめな	日本（京都）	−0.100	**	−0.115	**	−0.073	*	0.006		−0.126	**	−0.041	
	韓国（ソウル）	0.162	**	0.305	**	0.222	**	0.170	**	0.264	**	0.187	**
	カナダ（トロント）	0.065		0.159	**	0.184	**	0.263	*	0.263	**	0.170	**
恥ずかしい	日本（京都）	−0.050		−0.127	**	−0.229	**	−0.163	**	−0.236	**	−0.187	**
	韓国（ソウル）	−0.094	*	−0.258	**	−0.266	**	−0.203	**	−0.264	**	−0.202	**
	カナダ（トロント）	−0.190		−0.199	**	−0.277	**	−0.208		−0.279	**	−0.106	
遊び感覚	日本（京都）	−0.004		0.032		−0.128	**	0.071		−0.059		−0.050	
	韓国（ソウル）	0.069		0.103	**	0.084	*	−0.087	*	0.043		0.000	
	カナダ（トロント）	0.034		0.120	**	0.199	**	0.145		0.182	**	0.235	**
時間に余裕のある人がする	日本（京都）	−0.049		−0.216	**	−0.268	**	−0.263	**	−0.305	**	−0.248	**
	韓国（ソウル）	−0.221	**	−0.163	**	−0.144	**	−0.175	**	−0.183	**	−0.266	**
	カナダ（トロント）	−0.025		−0.241	**	−0.272	**	−0.383	**	−0.270	**	−0.158	*
データ件数	日本（京都）	1191		752		744		416		875		321	
	韓国（ソウル）	500		770		914		665		760		382	
	カナダ（トロント）	243		645		478		60		538		265	

備考：Pearson's r　有意水準　＊＊は１％以下，＊は５％以下

も，また，「冒険的な」は日韓において，無相関となっており，教員データと学生データとの間には著しい違いを見てとることができる。

こうしたイメージ構造Ａの分析から「ボランティア文化」の構造を捉えることができ，各国ごとのボランティア文化の特質を数値傾向によって把握することが可能であることが確認できるだろう。

では引き続き，2004年高校教員データに注目してイメージ構造Ｂの分析に移っていこう。その前に，2000年・2001年大学生データと2004年高校生・教員データで，各国のボランティア活動状況を把握しておこう。ここで，ボランティア活動回数とは，それまでの人生で経験したボランティアグループや団体を通じたボランティア活動経験回数（学校でのボランティア活動を含む）の総計である。

図１と図２をボランティア体験無し層に注目して比較しておくと，韓国（ソウル）の数値は2004年データで30％から６％に減少しているのに対して，2004年の時点で日本（京都）の高校生では35％であり，依然として無体験層が大きな比率を占めていることが分かる。また，カナダ（オンタリオ州トロント）では，2001年大学生データでも2004年高校生データでも，50回以上体験者が20％もいることが分かる。教員データでは，なんと，100回以上の割合が40％に達している（ただし，カナダの教員データ件数は少ない点には注意を要する）。これに対して，日本（京都）・韓国（ソウル）の教員では，体験無し層が１/４程度は存在している。ボランティア先進国としてのカナダにおける活動水準の高さ，とりわけ，教員の体験者層の厚さには驚かされる[3)]。

2004年高校教員データに基づき，ボランティア活動から得られた「学びの力（能力）」（イメージ構造B）について示したのが図５である。2004年高校生調査では，日本における調査票の印刷で一部に誤植があったため，イメージ構造Ｂに特異値が出てしまった。そこで2007年高校生データに差し替えて，制作したのが図４である。

まず，図４で３か国高校生のイメージ構造Ｂを見

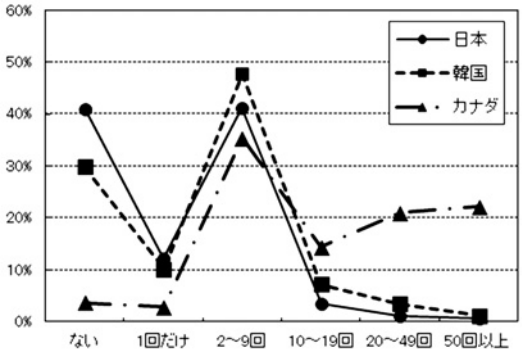

図１　大学生のボランティア体験（2000・2001年）

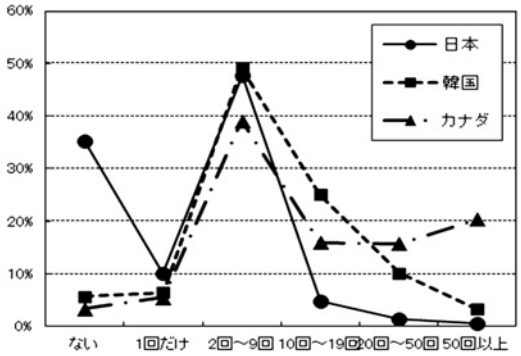

図２　高校生のボランティア体験（2004年）

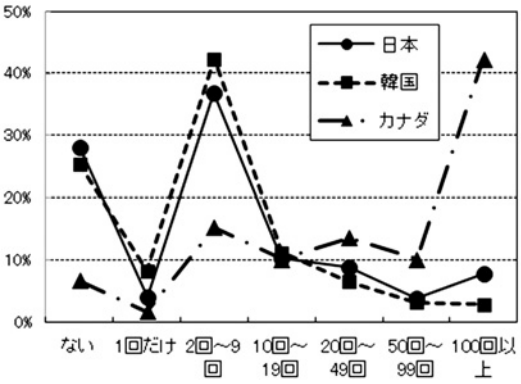

図３　高校教員のボランティア体験（2004年）

ると，ボランティア活動において，これら３カ国共通のボランティア活動の学びの特徴を見てとることができる。すなわち，「相手の意見や相手の立場を理解する力（他者理解力）」，「さまざまな人たちと『つながり』を作っていく力（社会連携力）」「社会を

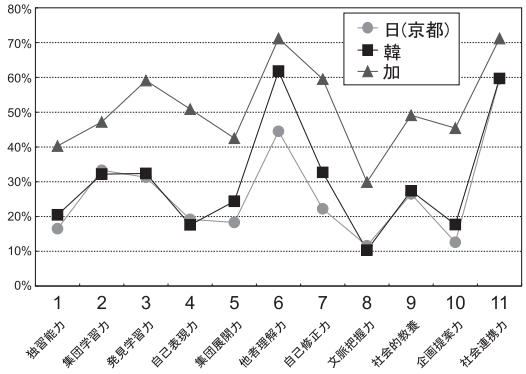

図４　高校生によるボランティアの学びの効果の認識（2007年）

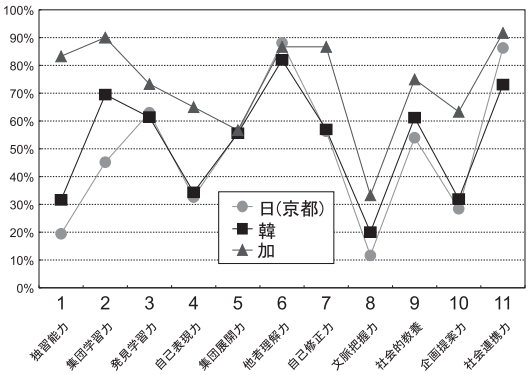

図５　先生側のボランティアの学びの効果の認識（2004年）

政治や経済や文化など広い視点から見る力（社会的教養）」「自分で問題を発見する力（問題発見力）」「自分の意見を修正し，グループに協調する力（自己修正力）」などの能力養成にボランティア活動は強みを持っているのである。

また，「他者理解力」「自己修正力」において，日本データが低くなっているものの，日韓高校生のイメージ構造Ｂのパターンはきわめて近似していることが分かる。

図５の３か国教員のイメージ構造Ｂにおいても，日韓のデータパターンの類似性には驚かされる。韓国教員データにおいて「独習能力」「集団学習力」が，また日本教員では「集団調整力」が若干高くなっているほかは，両国の折れ線グラフはほぼ重なり合っている。これに対して，カナダ（オンタリオ州）教員の場合，全般的にその数値は高く，とくに「独習能力」「企画提案力」「自己表現力」「自己修正力」で日韓教員データを大きく上回っている。カナダ（オンタリオ州）教員のボランティア活動を巡る文化資本の高さを示していると言えるだろう。

イメージ構造Ｂからは，まず，ボランティア活動の教育効果には，一定の特徴があることが視覚的に把握できる。こうしたグラフに基づき，ボランティア先進国カナダ（オンタリオ州）と対比することによって，日韓両国におけるボランティア文化の問題点を明確化することができる。

図６，７，８では，各国の状況をさらに詳細に把握できるように，教員と生徒のイメージ構造Ｂを各国ごとに対比している。これらの図からは，まず当然ながら，教員のイメージ構造が生徒のイメージ構造を規定するという，学校という場の基本的な性格について改めて気づかされる。ボランティア教育における教員側の責任の重さを改めて確認できるだろう。また，カナダ（オンタリオ州）と韓国に比べて，日本では，教員・生徒データで大きな格差があることも分かる。とりわけ，「他者理解」の数値には大きな開きがある。日本の学校教育におけるボランティア教育の後進性とそれに由来するボランティア文化が抱える問題を読み取ることができるだろう。

カナダのボランティア統計（CSGVP2004）を見ていくと，カナダ社会ではボランティア熱心層（ボランティア活動年間180時間以上層）は，性別・年齢別に関わらず８～13％程度存在している（Imagine Canada 2006, p.36）。こうしたボランティア文化に支えられて，大量の移民を迎える多文化社会カナダが成り立っているといっても過言ではないだろう。また，市民権を獲得するための事前教育プログラムでも，ボランティア活動によって社会に貢献することがカナダ市民としての基本的な義務であると教材に明記されており，世界各国から流入した移民たちは，カナダ市民の誇りとして，ボランティア重視の価値意識を刷り込まれていくのである。

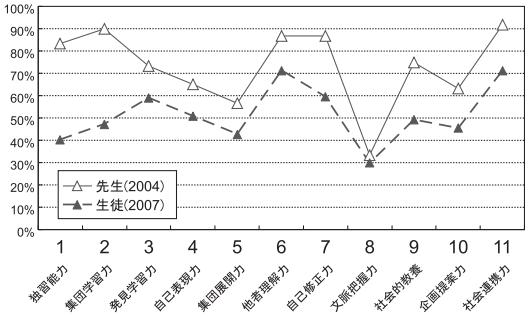

図６　ボランティアの学びの効果の先生・生徒比較（カナダの場合）

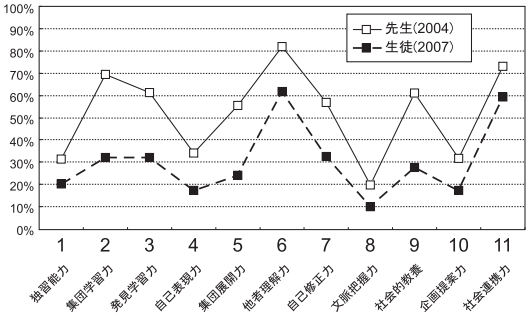

図７　ボランティアの学びの効果の先生・生徒比較（韓国の場合）

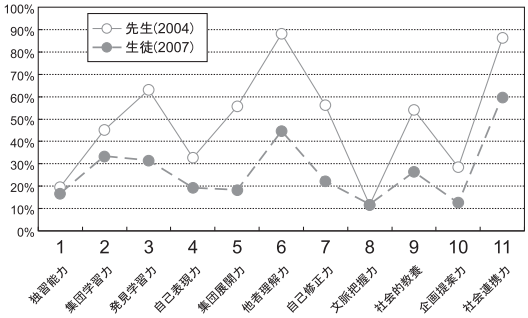

図８　ボランティアの学びの効果の先生・生徒比較（日本の場合）

筆者のフィールドワークを思い起こすと，2005年３月にトロントのある公立高校を訪問した際に，高校生グループがスマトラ沖地震に伴う津波被災者に対して救援募金活動を行っていた。彼らは，新聞やインターネットから情報を集め，いかに仲間に伝えるべきかを考えながら，情報発信に工夫を凝らしていた。こうしたボランタリーな活動は，自治会メンバーのある学生の働きかけから始まっていた。カナダのボランティア活動において，「新聞や本を読んで，論点や文脈を把握する力（文脈把握力）」「新たな企画を提案する力（企画提案力）」が重要となること，また，教員データから見てとれるように，「独習能力」を前提とした「集団学習力」がボランティア活動の基盤となることを，こうした事例は物語っている。また，ボランティア活動を楽しくしていくこと，つまり「遊び感覚（like play）」や「冒険的な」要素を組み入れることは，多くの賛同者を得るためには必須となる。ボランティア活動への参加は当然だというカナダ文化においては，日韓ではネガティブイメージであった「強制的」というイメージも，ボランティア関心とは無相関となっている。このようなボランティア文化が，ボランティア体験を豊富に持つ教員たちの日常的言説・行動から，生徒たちに浸透していくのである（隠れたカリキュラム）。

１－２　京都と東京の調査結果

海外の動きに触発され，2000年前後に，日本でもボランティア活動義務化の是非を巡る議論が沸き起こった。しかしながら，実際に制度化まで進んだのは，2007年からの東京都公立高校のケースに限られている。筆者は，都立高校の協力を得て，2007年（７校）と2008年（４校）の２カ年にわたって生徒に対するボランティア意識調査を実施した。

本節では，東京と京都のデータをイメージ構造に注目して比較分析していくことにしよう。表３ではイメージ構造Ａ，図10ではイメージ構造Ｂを東京と京都の場合に分けて整理している。図９では，これらの調査の背景となった高校生ボランティア体験率の変化状況を示している。ボランティア体験無し層は，東京では，2007年にすでに16％に低下しているが，義務化制度の導入によって，2008年ではさらに低く６％になっている。表３および図10から，ボランティアイメージとイメージ構造Ａ・Ｂを見ていくと，以下の諸点が読みとれるだろう。

表３　ボランティアイメージ / イメージと関心の相関係数（東京と京都の学生・生徒データの経年変化）

ボランティアイメージ	都市別	肯定回答パーセント				ボランティア関心との相関係数							
		2000 大学	2007 高校	2008 高校	2010 大学	2000大学		2007高校		2008高校		2010大学	
自己犠牲	京都	33.0	32.7		45.2	−0.226	**	−0.250	**			−0.345	**
	東京	36.1	38.3	39.9	48.2	−0.250	**	−0.258	**	−0.385	**	−0.222	**
偽善的な	京都	37.4	32.8		41.6	−0.077	**	−0.333	**			−0.172	**
	東京	37.8	33.6	38.5	41.1	−0.319	**	−0.262	**	−0.271	**	−0.242	**
困った人を助ける	京都	88.9	92.5		91.3	−0.017		0.062				0.019	
	東京	87.6	89.0	85.7	95.1	0.067		0.165	**	0.115	*	0.020	
人気のある	京都	30.1	12.7		32.2	0.071	*	0.251	**			0.142	*
	東京	24.5	12.3	15.2	21.3	0.260	**	0.217	**	0.123	*	0.144	**
強制的な	京都	7.9	14.2		10.3	−0.143	**	−0.235	**			−0.142	*
	東京	8.7	17.5	23.3	9.3	−0.190	**	−0.226	**	−0.333	**	−0.094	
お金では得られない	京都	82.5	79.5		82.2	0.102	**	0.238	**			0.275	**
	東京	83.9	76.1	77.0	84.3	0.359	**	0.340	**	0.177	**	0.175	**
冒険的な	京都	44.3	42.9		59.5	0.049		0.198	**			0.195	**
	東京	45.6	36.6	34.6	44.7	0.316	**	0.282	**	0.212	**	0.222	**
知識や経験が社会に生きる	京都	88.7	79.7		86.6	0.304	**	0.379	**			0.288	**
	東京	87.3	76.4	75.3	85.1	0.343	**	0.408	**	0.371	**	0.297	**
楽しい	京都	56.8	46.5		63.4	0.451	**	0.486	**			0.454	**
	東京	48.7	47.9	51.7	52.7	0.468	**	0.565	**	0.509	**	0.466	**
おせっかいな	京都	26.2	19.5		27.7	−0.128	**	−0.249	**			−0.135	*
	東京	22.8	25.0	26.1	25.2	−0.159	**	−0.253	**	−0.312	**	−0.165	**
自分が成長する	京都	92.5	81.7		90.0	0.363	**	0.376	**			0.347	**
	東京	89.2	78.4	77.2	87.8	0.365	**	0.420	**	0.406	**	0.309	**
まじめな	京都	70.1	79.3		82.2	−0.100	**	−0.126	**			−0.041	
	東京	78.4	77.8	80.9	88.5	−0.115	*	0.014		0.081		−0.037	
恥ずかしい	京都	17.7	17.7		10.6	−0.050		−0.236	**			−0.187	**
	東京	17.2	20.3	17.4	13.0	−0.177	**	−0.201	**	−0.198	**	−0.090	
遊び感覚	京都	10.3	11.5		13.1	−0.004		−0.059				−0.050	
	東京	8.7	14.2	14.9	11.0	0.010		0.008		−0.161	**	−0.002	
時間に余裕のある人がする	京都	53.4	61.4		62.9	−0.049		−0.305	**			−0.248	**
	東京	59.0	62.9	61.5	66.0	−0.177	**	−0.228	**	−0.325	**	−0.222	**
データ件数	京都	1191	875		321	1191		875				321	
	東京	379	536	356	409	379		536		356		409	

備考：Pearson's r　有意水準　＊＊は１％以下，＊は５％以下

（１）ボランティアイメージやイメージ構造Ａ・Ｂの傾向性は，東京と京都のデータ間でかなり似通っている。韓国やカナダのケースと比べると，その同質性は明らかである。東京と京都という距離的に離れた都市でも，このように近似した傾向が見られることから，ボランティアイメージという主観的なデータに依拠して，「日本的」なボランティア文化の特徴を析出することが可能であると結論できるだろう。これは韓国でも同様であろうと推察される。しかしながら，カナダの場合は，NSGVP や CSGVP などの連邦ベースでの全国調査データを見ると州ごとの差異も一定見られ，また，教育制度も州ごとに異なるので，留保無く「カナダ的」と括ることはできない。今までの記述で，カナダ（オンタリオ州）と表現してきたのは，こうした判断に基づいている。

（２）日本（京都・東京）データにおいて，ボランティア＝「偽善的」という認識パターンは，青年層でいずれも３割を越えており，こうしたデータからも，日本のボランティア文化の重大な問題の１つであることを改めて確認することができる。

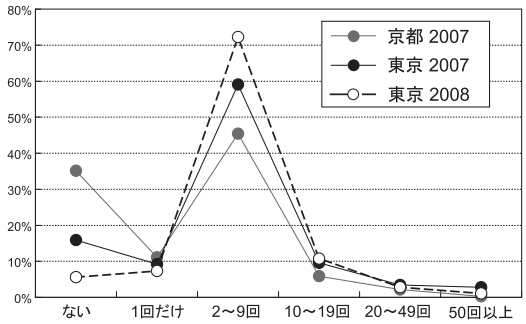

図９　高校生のボランティア体験（京都と東京）

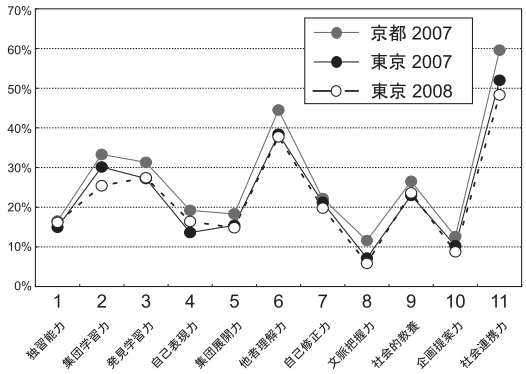

図10　高校生によるボランティアの学びの効果の認識（京都と東京）

（３）京都と東京のデータで，ボランティアイメージを仔細に比較すると，ポジティブイメージである「人気のある」「楽しい」では京都の比率が高く，ネガティブイメージである「まじめな」「時間に余裕のある人がする」は東京の比率が高いことが分かる。つまり，青年層のボランティアイメージが全体的に東京に比べて，京都の方がポジティブだということである。こうした背景には，一概には断定できないが，阪神淡路大震災のボランティアブーム以降の関西地域におけるボランティア活動活性化の影響ではないかと推察される。この意味で，東日本大震災以降の東京の動向が気にかかるところである。

（４）経年変化に注目すると，東京でも京都でも，ネガティブイメージである「まじめな」「時間に余裕のある人がする」「自己犠牲」が2000年から2010年に向けて統計的に優位に増加しており，京都では，「冒険的な」が増加している。日本の若年層のボランティア文化をエンパワーしていく必要があるだろう。京都の大学生データの一面におけるポジティブな変化の背景には，阪神淡路大震災以降，各大学で設置された大学ボランティアセンターによる良質なボランティアプログラムの提供という大学教育改革が背景としてあるように思われる。

（５）図10で2007年と2008年の東京の高校生データを比較分析すると，2008年データで統計的有意な差とまでは言えないが「集団学習力」「社会連携力」やその他の項目でも低下している。2008年調査は義務的なボランティアを体験し始めた高校２年生を対象として実施しているが，かえって，ボランティア活動に対する学びの効果の認識が劣化している可能性が高く，この点が気がかりである。

以上見てきた各国各様のボランティア文化を社会的に支える「文化装置」には，宗教組織，地域コミュニティ，企業，NGO・NPO など様々なものがあるが，その中でも，学校教育の持つ影響力は大きい。そこで，次章では，生徒のボランティア意識に影響を与えたと思われる各国の教科書や教材の国際比較を試み，各国のボランティアを巡る教科書とその他の教材の国際比較研究を進展させることが重要であることを確認したい。

２．各国市民教育教材分析の重要性

カナダ・オンタリオ州教育省は，高校卒業要件としての40時間ボランティア義務化と同時に，2000年から『公民（Civics)』という教科を必修化した。そこで，オンタリオ州の『公民（Civics)』教科書を見ていくと，Informed Citizenship，Purposeful Citizenship，Active Citizenship，Global Citizenship という４つの概念で形成される Citizenship Education という教育思想にその基盤を置いている（Gordon, D MacFadden, J & Watt, J. 2005，Ruypers, J. & Ryall, J. 2005)。こうした理念のもと，生徒は，カナダ多文化社会の中でそれぞれが抱く価値観の多様

性を尊重し合っていくこと，人権の尊重を基盤とした民主的な意思決定過程を重視すること，そして，生徒が居住する地域社会においても，カナダ社会においても，さらにグローバル社会においても，責任ある市民として生きていくことを求められている。また，市民としての社会的素養が求められるばかりでなく，具体的な問題解決に向けて社会的活動を行っていく能力，すなわち，調査能力と実践能力が重視されている。ボランティア体験（community involvement activities）プログラムは，こうした思想的基盤のもと，理念としてはActive Citizenshipの具体化として位置づけられているのである。カナダ多文化社会における地域活動は，多様な文化的背景を持つエスクック・コミュニティと切り離すことはできず，必然的にグローバルコミュニティという概念が生まれていく実質的な社会基盤がある。そこから，Global Citizenshipという理念が多文化社会を支える市民教育思想となっているのである。

これらの『公民（Civics）』教科書では，様々なNGOが紹介されているが，青少年リーダーの育成活動を使命とするNGOであるLeaders Today（Marc Kielburger，Craig Kielburgerの兄弟によって設立）も取りあげられている。この団体が制作したTake Action（Kielburger, C. & K., 2002）という冊子に注目して，カナダにおけるボランティア教育の特徴を読みとっていこう。

この冊子は，小中学生に向けたActive Citizenshipの具体的な指南書である。この冊子では，いかに社会問題を発見し，社会問題を自身の問題として抱えていくかとうスキル，そして，その解決に向けて行動に移していくスキル，具体的には，調査スキル，グループマネジメントスキル，資金確保のスキル，企画書の書き方などが詳細に噛み砕いて説明されている。

まず強調されるのは，子どもの権利条約における子どもの意見表明権である（Kielburger 2002 p.36）。具体的な活動事例としては，「春や秋の間は，校舎の外で昼食をとりたい。教室が高温になり，快適な状況とはいえないから」という嘆願書のサンプルなどが取りあげられている（Kielburger 2002 p.47）。こうした活動のための政治的な請願活動が，子どもたちにとって必須なスキルとして重視されており，議員への手紙の書き方なども詳しく説明されている。小学生であっても，社会問題に立ち向かい，政治家に働きかけていくことが期待されているのである。

この冊子は，Kielburgerたち自身が子どもの貧困問題（児童労働問題）で国際的に活動してきた経験に裏付けられている。若者らしい発想を肯定し，そこにボランタリーな行動の源泉をみる姿勢は注目に値する。カナダの市民教育は，NGOのこうした教育力量によって力強く支えられているのである。カナダの多文化社会は，ボランタリーセクターの支えなくしては存立しえない。こうした確信は，多くの教員の通念ともなっているし，教員自身がNGOを基盤としたボランティア活動を体験していることが，ボランティアに関わる教育力量の基盤となっているのである。

では，韓国の場合ではどうであろうか。ボランティア義務化に伴ってボランティア教育に関する特別な学校教材は制作されなかったので，『道徳』の教科書に注目すると，ボランティアに関して詳しく記述のあるのは，中学校2年次用の『道徳』教科書であった。そこで，当時使われていた『道徳2』（ソウル大学・師範大学国政教科書編成委員会 2008，ただし初版は2002年に発刊）を見ていこう。この教科書では，まず，韓国道徳教育の重要な要素として，伝統主義とナショナリズムが強調されている。具体的には，「混沌とした社会に直面する時，伝統的な価値観が私たちの指針として価値基準を提供してくれます」「（伝統的な価値によって）隣人との相互扶助や集合的な意識（が保証されます）」「伝統的な道徳観によってこそ，韓国国民はナショナルアイデンティティを確認することでき，それは，私たちが1つの民族として進むべき道を照らしだします」（ソウル大学・師範大学国政教科書編成委員会 2008，pp.8-16）と記述されている。韓国のボランティア

教育は，公共への奉仕という伝統的な価値観が基盤となっている。そうした価値観に依拠して，道徳教科書で，日本留学中に駅ホームから転落した人を助けるために線路に降り，自らは命を失った韓国青年の事例が取り上げられ，その自己犠牲の精神が称えられる点はきわめて興味深い（ソウル大学・師範大学国政教科書編成委員会 2008，pp.77-85）。

この道徳教科書のなかで規定されている「ボランティア」概念に注目すると，ボランティア活動とは，他者や報われない人，そして，地域共同体を助ける自発的行為であり，自己実現，他者を思う気持，計画に基づく継続性が求められ，自己犠牲の精神（自分の利益を部分的に捨てること）に基づく，見返りを求めぬ行為であり，結果として自己成長に繋がる行為であるとされている。2004年・2007年の韓国の高校生データでは，ボランティア活動に対して「自己犠牲」がポジティブイメージとなっており，ネガティブイメージである日本やカナダと際立った相違を示しているが，こうした背景として，1995年のソウル市でのボランティア義務化以降，中等教育課程の学校教育を通じて，ボランティア＝自己犠牲という伝統的な価値意識が生徒に強く刷り込まれたのではないかと推測される。

しかし，他方でこの道徳教科書では，韓国社会で民主化運動の基盤ともなったNGOの活躍が肯定的に評価されている。こうしたNGOに関する記述には，日本の当時の公民教科書より力が入れられており，紙片も多く割かれている。たとえば，Dong Gang Damダム建設反対の市民運動に対しても，民主的な運動として高い評価が与えられており，民主的な市民活動に対する積極的な記述も注目される（ソウル大学・師範大学国政教科書編成委員会 2008，pp.86-94）。

韓国においては，公教育における教育改革と並行して，民間ベースでは，ボランティア21などのNGOが独自にボランティアセンター機能を果しており，そこでは北米のサービスラーニングの思想とスキルトレーニングが導入されている。韓国社会には，こうした先進的なNGOが学校ボランティア教育の不十分性を補おうと努力している点も見逃してはならないだろう。

最後に，日本のケースを見ておこう。アクティブな市民教育の教材としては，東京都品川区の小学校・中学校の教材『品川区小中一貫教育　市民科』（品川区教育委員会 2006）が先行事例とされている。そこで，この教材に注目すると，そこにはカナダ（オンタリオ州）市民教育の基盤でもあったActive Citizenshipの思想を確かに読み取ることができる。しかしながら，この教材で目指されるのは，まず，生徒たちが生活する地域における地域活動の大切さを認識すること，そして，地域の一員としての責任意識を持つことにある。つまり，地域コミュニティを基盤としたワークショップを通じて，地域社会のリーダー層の育成が目的とされており，カナダ（オンタリオ州）との大きな違いは，Global Citizenshipという地球規模で課題を展望しようとする姿勢に乏しいことである。こうした指摘に対しては，日本社会における初等・中等教育として致し方ないとの反論もあるだろう。だが，ボランティアリズムが偏狭なナショナリズムや国家主義に陥いらないためには，カナダ（オンタリオ州）多文化社会のなかで育まれたGlobal Citizenshipという思想はきわめて有用なものと言える[4)]。

東京都公立高校の「奉仕」科目では，北米スタイルのサービスラーニングプログラムの思想に基づき，事前教育―地域活動―振り返りと事後教育というプログラムの流れが授業の理想型とされている。また，この科目の導入に伴って『奉仕～高校生の力で社会をよりよく変えよう！～』（東京都教育委員会 2006）という教材も開発されている。この教材では，「自由意思」が第一義的に強調されており，生徒たちがグループワークを通じて学んでいくワークショッププログラムが多数収録されている。生徒は，身近な問題からグルーバルな問題に至るまで，社会問題の解決に向けた学びを企画・実践・振り返りというステップで進めていくことが求められている。し

かしながら，こうした学びを指導していくためには，前提として教員側のボランティア活動に対する認識枠組みでの成長（つまり，イメージ構造Bの改善）や実際の指導の際のファシリテート能力（創造的な社会的活動体験が基盤となる）が求められる。カナダのケースで見たように，教員側にボランティア文化に関わる文化資本が備わっていなければ，こうした実践教育の真意を捉えて，成功裡に実施していくのは難しいと言えるだろう。2008年の調査結果を見る限り，こうした心配が杞憂では無いことが表れている。実施から，10年近くが経った現在の状況の把握が求められるところである。

いずれにしても，ボランティア意識調査による実証的なデータを基盤として，この間のボランティアに関連する各国の学校教科書・ボランティア教育教材の総体の変遷を包括的にテキスト分析していく国際比較研究プロジェクトの立ち上げが必要となるだろう[5)]。

結びに代えて：今後の研究展望

ボランティア文化に関する研究は，従来，主として文献研究やフィールドワーク研究に依拠して進められてきた。また，量的調査に基づく場合も，行動様式や価値意識に関するデータ分析に留まってきた。筆者は，これに加えて，２つのイメージ構造の把握というアイディアを工夫することによって，ボランティア文化の数値化を追究してきた。本稿では，こうしたアイディアに依拠して，1996年から2011年にわたって実施した経年調査データに基づき，「見えないボランティア文化」を可視化することによって，ボランティア意識やボランティア活動の中身に立ち入って，国際比較分析と経年変化比較分析を試みてきた。こうした挑戦は，ボランティア文化研究の新たな領域を切り拓く一助となるだろう。

さて，一連のボランティア意識調査データ分析から，日本が直面するボランティア問題の重大な側面が明かになった。日本の青年層の３割余りが，ボランティア＝偽善的という認識フレームに囚われているという点である[6)]。こうした日本のボランティア文化の特異性の背後には，いかなる社会的背景があるのであろうか。最後に，現段階での仮説をまとめておく。

（１）法人資本主義とも，タテ社会とも捉えられてきた，雇用者の全てを丸抱えする日本の企業社会の体質がその重要な背景として挙げられるだろう。企業生活に全てのエネルギーを注ぐことを求められてきた企業戦士にとって，ボランティア活動は生産的な価値あるものとは見えず，地域活動は家を守る主婦層の付き合い程度のものに過ぎないと貶められてきたのである。

（２）しかしながら，日本社会は地域コミュニティを基盤とする相互支援システムによって支えられてきたといっても過言ではないだろう（高齢者の見守りと民生委員の活動研究会 2013）。日本社会においては，成人して家庭を持ち，子育て期になると，町内会・自治会活動やPTA活動を通じて，地域社会の相互支援システムの中に参加する機会を持つというのが一般的である。しかしながら，子ども期は別として，中・高・大学生と成長するにしたがって，青少年は地域社会から切り離されていく。こうした地域社会からの「根こぎ」こそ，貴重なボランティア体験の可能性を青年層から奪いとってきた元凶ではないか。しかも，学校も地域コミュニティから次第に切断されていき，多くの学校があたかもゲイティッド・コミュニティと化してしまい，また，教員側も周辺地域の諸組織とネットワークを形成していく能力を鍛える機会を失っていったのである。

（３）韓国でもカナダでも，宗教組織は社会を支える一角としてしっかりと位置づいており，そうした宗教組織の働きかけを通じて，青年たちにボランティア精神が植え付けられていく通路が維持されている。これに対して，日本社会の世俗化は甚だしく，宗教組織という文化装置を通じて，相互扶助の精神が青年たちに注入されることは難しくなっている。

（４）さらに，日本のアカデミズムにおいても，ボ

ランタリーセクターを付随的な存在とみなし，その力量を過小評価する傾向が強いように思われる。ボランティアリズムに対する研究が「社会創造の学」として，社会科学の中核として位置づけられていない日本のアカデミズム界の責任も重大である。

こうして日本の現状を振り返ると，健康的で民主的で平和で安全な社会を支えていくボランティア文化を追究していく社会科学的研究の進展は喫緊の課題と言えるだろう。

ところで，すでに拙著論文「市民教育とボランティア」（小澤 2008）では，①新自由主義とボランティアリズムの親和性，②ボランティアリズムと国家主義（ナショナリズム）・集団主義との親和性，③ボランティアリズムと市民活動への発展可能性について検討を加えている。またこの論文では，ボランティアを文化資本の視点から捉えることの重要性についても指摘している。ボランティア活動がキャリア形成に役立ち，象徴資本（学歴）や経済資本に転化するとすれば，社会の階層化を促進する役割を果たすからである。こうしたボランティア問題を念頭に置きつつ，各国のボランティア文化を客観的に把握しながら，市民教育の在り方を，実証的なデータに基づき，考察していくことは，引き続き重要な課題となるだろう。その際，以下の諸点が今後の課題として浮かび上がってくる。

（１）2011年３月に起きた東日本大地震の影響は，とりわけ，東京を含む東日本の青少年に大きなインパクトを与えているものと推察される。関西地域の青少年のボランティア意識には，少ながらず1995年の阪神淡路大震災後のボランティアブームの影響が見られる。東日本大地震後の東日本の青年層のボランティア意識の変化を把握することは，経年変化を見ていくうえで重要なテーマとなる。また，震災から数年が経た現在，東京都のチャレンジを評価するためにも，再び，京都と東京の青年層と教員層のボランティア意識調査を継続実施する必要があるだろう。2020年前後で，国際調査を再度実施することができれば，生徒と教員の20年間にわたる変容を把握することも可能となる。

（２）その際，日本・韓国・カナダを対象とする国際比較調査のフレームを継続する意義は，本稿から明らかである。しかしながら，国際比較としてボランティア文化研究を進展させていくためには，さらに中国・台湾などや他の諸国を加えていくことも必要となる[7)]。

（３）学校ボランティア教育の中身を見て行こうとするとき，すでに指摘したように，数値的な文化比較研究に裏付けされた学校教育におけるボランティアに関わる教科書・教材総体に対する国際的なテキスト比較分析が必要となる。さらに，学校の教育現場における具体的なプログラムの実施状況を詳細にフィールド調査を実施していく必要もある。

こうしたボランティア文化研究の新たな挑戦は，もはや個人プロジェクトの力量を越えている。国際的なネットワークに基づく，共同研究プロジェクトの立ち上げが待たれるところである。

注

１）　日本の社会生活基本調査1996年および2006年，韓国の Social Statistics Survey 1999年および2006年，カナダの NSGVP 1997年および CSGVP 2004年という公的なボランティア活動調査を基盤として，各国の年齢グループごとにボランティア参加率（過去１年間にボランティア活動を１回以上した者の比率）を見ていくことができる。こうした調査結果を見ていくと，カナダにおいては，あらゆる年齢層において，ほぼ３割程度のボランティア参加率に達しているのに対して，韓国においては，1999年調査では若年層では38.8％と比較的高いボランティア参加率を誇っているが，他の成年層では低くなっている（国民平均では13.0％）。日本に目を転ずると，1996年調査では，若年層のボランティア参加率は13.4％と他の世代に比較してかなり低いことが分かる（国民平均は25.3％）。こうした世代別ボランティア参加率のグラフの特徴から，われわれは，これら３カ国に，対照的なボランティア文化を見いだすことができる。調査対象国として，日本・韓国・カナダという３カ国

を選別している理由には，世代別ボランティア参加率からみた三国三様の特異性がある。

2）　さらに詳しくは，千石（1998）がボランティアイメージ調査分析結果を紹介している。

3）　日本での調査において，ボランティア時間のなかに，教員の課外活動指導はカウントされていない。教員自身が，課外活動での指導をボランティア活動と認識もしていないからである。教員組合の力が強いカナダ（オンタリオ州）では考えられないことである。こうした時間をボランティア活動に換算するとすれば，日本の教員のボランティア体験回数のグラフの形状はかなり変わるかもしれない。こうした日本の学校教員側の認識フレームは，企業中心主義社会における企業戦士のそれときわめて近似している。

4）　現在の公民分野の中学校教科書を見ていくと，Active Citizenship（実践的・能動的市民教育）とGlobal Citizenship（地球市民教育）の発想が組み込まれている。こうした教科書記述の変化の過程とその影響を把握していく必要がある。また，公民分野に限らず，全ての教科にわたって「ボランティア」がいかに捉えられているか，ここ20年間のスパンで把握していくことも重要な課題となる。

5）　ここでは，詳細に提示することはしないが，例えば，国際的なシティズンシップ教育の研究としては，すでに嶺井明子（2007）がある。今後は，数値的なデータに裏付けた国際比較研究が希求されるところである。

6）　日本の若年層におけるボランティア＝偽善的という認知フレームは，とくに，男性側に強く見られる傾向である。こうしたジェンダー差も日本のボランティア文化の特徴である。企業社会文化によるボランティア活動に対する非生産性のラベリングにより，主婦層（女性）が担い手の地域活動に対して，とりわけ，男性たちが非生産的な劣位の活動という偏見を抱いてきたのではないかと推察される。

7）　立命館大学大学院社会学研究科院生李丹妮氏による中国の大学生に向けた2015年のボランティア（志願服務）意識調査結果によれば，欧米のボランティア文化から隔絶した中国におけるボランティア意識は，日韓加３カ国のイメージ構造データとは異なったパターンを呈している。日韓加３カ国のデータ結果の背後には，ある種の共通した「市民社会」意識があることが想定される。

参考文献

赤井正二（1998）「「市民社会」の語られ方―1985～97年の新聞記事から」（立命館産業社会論集 1998年６月）pp. 61-73

小澤亘（1997）「ボランティアと学び」『文化的実践としての学生の「学ぶ活動」に関する認知科学的研究』（立命館大学教育科学研究所）pp. 25-44

小澤亘他（2000）編著『大学生ボランティアたちのこころの軌跡』（立命館大学教育科学研究所）

小澤亘他（2001）編著『ボランティアの文化社会学』（世界思想社）

小澤亘（2008）「市民教育とボランティア」（加藤哲郎・國廣敏文編『グローバル化時代の政治学』法律文化社）pp. 220-223

小澤亘（2013）「青年ボランティア文化の日・韓・加３カ国比較研究：市民社会とボランティア問題」（立命館大学人文科学研究 2013年３月）pp.183-212

千石保（1998）『日本の高校生　国際比較で見る』（NHKブックス）pp. 200-226

総務庁青少年対策本部（1994）『青少年とボランティア活動―「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書』（大蔵省印刷局）

高齢者の見守りと民生委員の活動研究会（2013）『民生児童委員調査報告書―2012年京都市・宇治市・八幡市悉皆調査』

嶺井明子（2007）編著『世界のシティズンシップ教育―グローバル時代の国民／市民形成』（東信堂）

Imagine Canada (2006) Highlights from the 2004 Canada Survey of Giving, Volunteering & Participating.

Kielburger, C & K (2002) *Take Action! A guide to Active Citizenship,* Thomson-Nelson

Gordon, D MacFadden, J & Watt, J. (2005) *Civics Now,* Thomson-Nelson

Ruypers, J. & Ryall, J. (2005) *Canadian Civics,* Emond Montgomery Publication Limited

ソウル大学・師範大学国政教科書編成委員会（2008）

『中学校 道徳２』（志学社）「중학교 도덕２」（지학사　2008년 3월 7일 발행）
品川区教育委員会（2006）『品川区小中一貫教育　市民科』（教育出版）
東京都教育委員会（2006）『生徒用テキスト　奉仕　～高校生の力で社会をよりよく変えよう！～』

謝辞：一連の調査実施に当たって多くの方から支援を受けた。Dr. Agnes Meinhard，Dr. Kwang-Yeong Shin，Dr. Kanghyun Lee，Dr. Ki-Soo Eun，Dr. Erik Fong，伊奈正人教授を始め，全ての協力者に心より感謝申し上げたい。韓国の道徳教科書の翻訳では，金正泰氏（コリア国際学園）のお世話になった。また，本調査研究は筆者が代表を務めた文部省科学研究費（萌芽的研究 No. 10871037，基盤研究(B)No. 14402003，基盤研究(C)No. 18530420），文部科学省オープンリサーチプロジェクトによる研究支援，そして，立命館大学からの研究支援（研究の国際化推進プログラム多様な国際連携スタートアップ）などによって実現した。併せて心より感謝申し上げたい。

Research Note

A Comparative Study of Volunteer Culture in Japan, Korea and Canada

OZAWA Wataru [i]

Abstract : Reviewing the researches that I conducted from 1996 to 2011 in Japan, Korea and Canada, I have reflected on the significance of comparative study of volunteer culture with regard to citizenship education. Firstly, I have reviewed in this paper the usefulness of my concepts of two types of "image structure" in order to make an invisible "volunteering culture" visible by numerical analysis. Secondly, after analyzing these data, I have tried to understand the differences in volunteer culture between the three countries through my fieldwork and through reading the teaching materials in each country. The school education system is a form of the "cultural apparatus" of volunteer culture.

Keywords : volunteer culture, international comparative study, image structure, cultural apparatus, citizenship education

i　Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University